

事例研究報告

特別支援学校中学部生徒全員が
わかって話し合いに参加できるための
指導について

中学部の実態

中学部生徒 全員

聴覚障がいの程度が違い、口話中心の生徒、手話を使う生徒等、コミュニケーションモードも様々である。生活の中で、生徒同士が話し合っている様子を見ていると、相手の言っている言葉を正確に聞き取れていなかったり、内容を十分に理解できていなかったりする様子が見られた。また、相手に言いたいことが正確に伝わっていなくても、お互いにわかっていると思い込んで話を続けている様子も見られる。

研究の目的と教員の願い

相手の意見を受け止め自分の意見をわかりやすく伝える、質問や確認をしながらやりとりを進めるなどの力は、コミュニケーションの基礎である。生活の中で、自分の意見を発し、その意見が反映される経験は、自己肯定感や主体性を育むことができると考える。これらの力は社会で生きていく上で大きな力となる。

このような経験を多く積むことができるのは話し合い活動の場であると考えた。「相手に伝わる話し方を身につけ、話し合いの内容を全員が理解し、全員で話し合いを進めていけるようになってほしい」と願い、この研究に取り組んだ。

指導の目標設定の理由

- 現状
- ・ 正確に聞き取れていない、内容を十分に理解できていない。
 - ・ わからない時でも、そのままにしてしまう。
 - ・ お互いにわかっていると思い込んで話を続けている。
 - ・ 誰が発言しているかわかりにくい。
 - ・ 自分の意見を発表できない。
 - ・ どうせ多数決で決まるから・・・と諦めている。



目標

- ・ 相手に伝わる話し方を身につける。
- ・ 全員がわかったうえで、話し合いを進めることができる。

研究の経過

- ①生徒が話し合いの場面の動画を視聴し、気づいたこと、今後気をつけることを話し合った。

その意見を教員と確認してから、話し合いを行うようにした。



話し方や聞き方、注目の集め方など少しずつ自分で、意識できるようになる姿が見られた。

- ②教員は、話し合いのスキルをチェックするチェックシートに記録を始めた。



しかし、チェックシートの活用方法など、多くの課題が見えてきたため、改善が必要になった。

アドバイザーからの助言

①『チェックリスト』による評価について

- スキルは必要だが、スキルが身につくことと、話し合いが上手にできることは同じではない。振り返りを取り入れることで、生徒自身が「話し合いの内容がわかる」「理解して参加する」状態を自覚できるようにすることが大切である。



助言後の指導

- チェックシートによる評価から、話し合い活動を参観して気付いたことを付箋に書き留める方法に変更した。教員同士で付箋を見ながら話し合い、できていることや課題を共有するようにした。
- 振り返りシートを作成し、生徒が話し合い活動毎に目標や反省を記録するようにした。振り返りシートをもとに、教員と振り返りを行う時間を設けた。

アドバイザーからの助言

②話し合い活動を進めるための視点について

- ・ 必然性のあるテーマを設定することが必要である。
- ・ 教員が求めている正解を探すような話し合い活動にならないために、教員の介入を徐々に減らしていくことが必要である。
- ・ 話し合い活動のリーダーを育てるという視点が必要である。



助言後の指導

- ・ 必然性のあるテーマ（文化祭、遠足、お楽しみ会等、生徒に直接関わる行事）を設定して話し合い活動を行った。
- ・ 教員の介入を徐々に減らしていった。
- ・ 話し合いのリーダーを育てるために、司会を担当する生徒に合意形成の方法や、周囲の様子を見るなど、司会にとって必要なスキルを指導した。

事例 1：話し合いに消極的な生徒

指導前の生徒の様子

中学部 A・B

話し合い活動では、あまり積極性が感じられない状態であった。何か意見があっても、黙っていたり、自分の意見を発言せずに周りに合わせたりしようとする様子が見受けられた。

振り返りの内容

生徒から出てきた振り返りの内容をもとに、1対1で「どうしてできたと思うのか」「どうすればできるか」という問いかけを行った。

生徒からは「言い方がわからなかった」「ホワイトボードを持っていったらいいかも」などの意見や「少数派の意見を言う必要性はないのではないか」という意見が出たため、それに対する助言等を行った。

指導後の生徒の変化

- ・自ら教室の携帯ホワイトボードを準備することができた。
- ・自分の意見を積極的に言う姿が増えてきた。
- ・文字だけでなく、イラストなど多様な手段で伝えようとする姿が増えた。
- ・友達の意見を整理したり、質問したりする姿が見られた。

考察

ホワイトボードを準備し活用したことが、発信に対する心理的ハードルの低下を促し、その結果、発言の増加につながったと考えられる。その中で、「伝わる体験」や「意見を認められる体験」「一人の意見から話し合いが変わっていく体験」を重ねることで、意見を言うことの意義を見いだしていったと考えられる。また、伝えたい・わかってもらいたいという気持ちが高まり、振り返りの場面でも、どのように伝えるかを考える姿が見られるようになった。さらに、少数派の意見を言うことをためらっていた生徒にとっても、意見を言うことは無駄ではないということを実感するいい機会となったようであった。

事例2：自分の意見が正確に伝わらない生徒

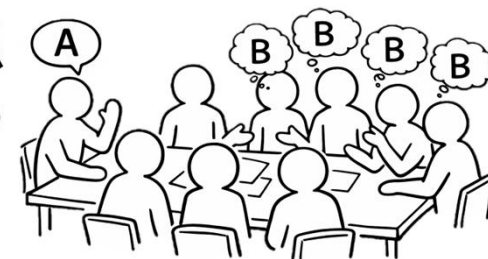
指導前の生徒の様子

中学部生徒C

話し合い活動で意見を述べた時に、他の子に自分の発言の内容が伝わっているかどうかを確認することがなかった。また、自分が本当に言いたかったことと違う内容で相手に伝わってしまっていることがあった。

振り返りの内容

話し合い時、本人が話した内容（A）と相手が話を聞いて思い描いたイメージ（B）を紙にイラスト付きで整理してまとめて提示し、本人が言いたかったことと、相手が受け取ったイメージにずれがあったことを伝えた。



生徒の反応

「僕の言いたかったイメージはAだけど、相手にはBのイメージで伝わっているのを知ってショック。次は相手に自分の言いたいイメージがちゃんと伝わっているかどうか反応を見て確認したい。言葉で伝わらなかった時は絵に描いて説明する。」

指導後の生徒の変化

話し合い活動前に「相手に伝わっているかどうか反応を見る」と目標を設定することで、自分の意見を言う時は、相手の反応を見ながら話をする様子が見られた。また、相手に伝わっていないと思った時はホワイトボードに絵を描いて説明することができた。



考察

最初は「自分はAと言った＝相手もAと理解しているはず」と思って話をしていたが、実は自分の頭の中（A）と、相手の頭の中（B）がずれていること、言っただけでは同じ理解にならないことに気づいたことで、相手の表情や反応を見たり、言葉だけでなくホワイトボードに絵を描いて説明をしたりするようになったのだと考えられる。振り返り学習の中で、「ズレの存在を具体的に教えた」ことが、「話す」から「伝える」というように「一方通行のコミュニケーション」から「相手を意識したコミュニケーション」への成長に繋がったのだと思う。

事例3：話し合いの司会を担当する生徒

指導前の生徒の様子

中学部生徒D

話し合い活動では、自分の意見を主張することが多く、周囲をうかがって発言するという場面は少なかった。

振り返りの内容

本人の目標と反省をもとに振り返りを行った。生徒が課題に感じていることは、しっかりと対話を重ね、そのうえで、本人が気づいていない「できていたポイント」を多く知らせた。

また、話し合いをスムーズに進めるために話す順番や内容を決めて伝えることや「自分が知っていること＝皆が知っていること」ではないことなどを伝えた。

合意形成の方法についても、多数決以外の方法を伝えた。

指導後の生徒の変化

- ・話し合いの冒頭で、今日決めることを確認し、全員の理解を確かめながら進められるようになった。
- ・話が脱線しそうな場面で、流れを戻すなど周囲を意識した進行が見られた。
- ・進行を独断で行わず、書記と相談しながら調整しようとするようになった。
- ・意見の集約では、多数決だけに頼らず、意見交換を通してまとめようとするようになった。

考察

振り返りを通して、わかりやすい進め方や伝え方を意識するようになっていき、話し合いを「自分が進める場」から「皆が理解し合う場」ととらえるようになっていったと考えられる。うまくいかなかった点については、自分で考えるだけでなく、教員や友達にも助言を求めるようになり、次の活動に生かそうとする姿勢が見られた。そして、その改善点が、次の話し合い活動で実際に生かされることも多く、生徒の自信にも繋がっていったようであった。

全体の考察

- 個々に振り返りを行うことで、生徒の発達段階や言語力などに応じた指導が可能となり、それが個々の大きな変化につながった。
- 振り返りを通し、聞き方や話し方を工夫するようになり、話し合い全体がわかりやすくなったと言う生徒が多数であった。「わかる話し合い」となったことで、意見が考えやすくなり、発言の増加につながった。
- 振り返りを行うことで、自分の行動を客観的に捉え、より良くするために自分に何ができるかを考える姿が見られた。その中で『伝えたい』『わかりたい』という気持ちが高まり、話し合いへの意欲や態度の変化につながった。
- 振り返りを通して、友だちの良さを認めたり、困りごとに気づいたりするなど、他者理解の深まりも見られた。

全体の考察

- 必然性のあるテーマを設定したことで、全員がわかりやすく、主体的に発言・参加できる話し合いにつながった。
- 教員は必要な場面のみ介入することで、生徒一人一人が「自分ごと」として、捉え、生徒同士で合意形成しようとする姿が見られるようになった。
- テーマごとに司会を任せたことで、司会を継続して経験する機会が増えた。そのため、振り返りの中で、司会としての在り方を考え、実践するという学習パターンが形成され、活動に生かされていった。
- 指導することで、生徒が広い視野をもって話し合い活動に参加できるようになった。

今後に向けて

- 話し合い活動後の振り返りを継続する。これまでのように、できていることを認めた上で、課題がある場合は、改善点を考えるようにすることで次回の話し合い活動につなげる。
- 今後も、生徒の実態や話し合い活動で目指す目標などについて、教員間で共有し、教員の介入方法を検討する。
- 話し合い活動で育った力を、各教科、学校行事、職場体験等に般化させる。